# シアトル留学におけるアメリカングルメ体験記

応用バイオ科学科卒研生　白石 有希

サムライヌードルの看板

ゼリー寿司

2011 年、私は応用バイオ科学科の海外留学プログラムを利用して、アメリカのシアトルへ半年間留学した。私の海外留学は大部分が“食”で彩られていた（もちろん勉強も！）。その中でも、特に私がシアトルで発見した興味深い日本料理屋を紹介しようと思う。

最初に入った日本料理屋は、“Toshi's TERIYAKI”だ。TERIYAKI とはアメリカで大人気のチキンの甘辛焼きだ。日本で言うところの照り焼きとは微妙に異なるが、甘辛いタレは焼き鳥のタレに似ていて結構美味である。それにしても、Toshi さんはまたどうして自分の名前を屋号に選んだのだろうか？　恥ずかしくないのか？　この疑問は、今でも謎のままだ。次に入った日本料理屋は、その名も“サムライヌードル”というラーメン屋である。入り口には日本語で書かれた「ラーメン屋っす」の看板が掲げられており、一抹の不安を覚えながら中へ入店すると、厨房にはいかつい黒人男性のコックさんが鎮座していた…。味の感想は「スープがぬるい」、ラーメンにとって致命的な弱点を抱えたサムライヌードルである。しかしながら、私の足でぶらりと食べに行けるラーメン屋はこのサムライヌードルしかなく、この後帰国までに、何度かお世話になるのであった。

このほかにも、和食の範疇をこえたゼリー寿司やアロハラーメンなど、数々のアメリカングルメに遭遇したが、紙面の関係上それはぜひご自身で体験を…。

日本神話をベースにしたハイファンタジー

## 学生のおすすめ本　荻原規子（そらいろまがたま）『空色勾玉』

情報メディア学科卒研生　西仲野 結衣

**荻原規子『空色勾玉』**
**図書館 2 階書架に所蔵**
**（請求記号　913.6||0　）**

本書は、勾玉三部作のシリーズ第一作目となる日本神話をベースとしたハイファンタジー小説である。舞台は不死の力を持つ輝（かぐ）の勢力と転生を繰り返す闇（くら）の勢力が対立する古代日本である。主人公の狭也（さや）は輝の勢力が治める村で育った女の子である。ある日、不気味な一行に出会った狭也は自身が闇の勢力の巫女姫「水の乙女」であることを知らされ、様々な人たちと出会い、困難に戸惑いながらも乗り越えていく。

本書は、命の価値や自然の美しさ、神々の勝手や人の脆さなどが丁寧に描写され、物語の世界観に一気に引き込まれる。狭也の魅力的な登場人物との関わりは、時に人を傷つけ、傷つけられて引きこもったりする姿はまさに現代の思春期の女の子である。

輝の末子である稚羽矢（ちはや）は世間知らずで無垢という言葉が似合う。この他、輝の勢力のトップである苛烈な性格の照日王（てるひのおおきみ）、何を考えているかわからない月代王（つきしろのおおきみ）、茶目っ気たっぷりな烏などが、物語を盛り上げていく。

本書は小学校高学年でも読める本だが、『古事記』を知っていると“より”楽しむことができる大人の作品である。本書は狭也の成長物語のみならず、恋愛小説としても、またファンタジー小説としてもお勧めできる作品である。

※『古事記』…奈良時代に成立した現存する日本最古の歴史書

図書館 Café　Vol.2 No.1
発行日　2012 年 12 月 1 日
発行所　神奈川工科大学附属図書館
館長　田辺 誠
印刷　神奈川工科大学印刷室

編集委員会
編集委員長　池田 広昭
編集委員　本田 数博・丸山 充・楠木 伊津美
渡邉 怜・酒井 誠



# 図書館 Café

第 2 号
Vol.2 No.1

発行　/　神奈川工科大学附属図書館 2012.12.1


## 読書の楽しみ

学長　小宮 一三

今読書離れが進んでいるそうだ。その原因はインターネットの普及などにより情報獲得のチャンスが広がり、本そのものへの関心が薄れてしまったためとのことである。しかしこれは本当にもったいないことである。自分の半生を振り返れば、よい本との出会いはよき友、よき師との出会いに匹敵すると思う。学生諸君は技術の専門書に触れる機会は多いと思うので、わたくしの読書人生のきっかけとなった小説一冊を紹介しながら、読書の面白さ、大切さに触れてみたい。少し大げさな前置きとなったが、それは夏目漱石の『坊っちゃん』である。ああそれなら読みましたという学生諸君も多いと思う。私も初めて読んだのは中学か高校かはるか昔であるが、その後大学、社会人、教員と歳を重ねても数えきれない程繰り返し読んでいる。話は物理学校（今の東京理科大学）をでた主人公が四国松山の中学へ赴任し、そこでの学生との騒動、教員の人間模様など正義漢溢れる坊っちゃんの縦横無尽の活躍ぶりがテンポのよい文章で書かれている。驚くことにこの小説が世に出たのは明治 39 年であるが、今読んでも少しも古さを感じないことである。文句なく面白く、しかもその都度発見がある。自分の人生と重ねて、改めて理解できるところも多い。主人公と同年齢の頃は自分の生き方を比べて考えることが多かった。また、奉公人清（きよ）というお婆さんに対する真の優しさは、ある程度年齢が行って初めてわかったような気がした。本当によい本とは、読む人の人生と並走して、よき友であり、よき師である。『坊っちゃん』で小説の面白さに目覚め、その後『吾輩は猫である』『三四郎』『それから』・・・と夏目漱石に没頭し、小説の背景となる夏目漱石の生き方まで調べるようになった。四国の道後温泉でモデルとなった温泉の朝風呂につかりながら、漱石もこうして『坊っちゃん』の構想を練ったのかと思いを巡らせた。先日は 100 万部のベストセラーとなった『悩む力』『続悩む力』作者の姜尚中先生からお話を伺う機会を得た。漱石の作品は今日の社会を予言し、これからの人間の生き方を示唆しているというお話は、改めて小説の奥深さを感じた。

先生のお話を伺った後、また『坊っちゃん』を読み直したくなった。今度はどんな発見が待っているのであろうか。読書の楽しみは尽きない。

**夏目漱石『坊っちゃん』**
**図書館 1 階回転書架に所蔵**
**（請求記号　B913||N）**

## ホームページを一新 &読書促進キャンペーン

図書館のホームページを全面リニューアルしました。

トップページに資料検索機能を新設し、より使いやすくなりました。ぜひ今号で紹介された本を探してみてください。

また、図書館では引き続き「読書促進キャンペーン」を展開し、学生の皆さんの学びの支援と、読書の楽しみを提供してまいります。図書館は皆さんを応援します。

読書は学びのスタート！
月に 1 冊は本を借り、自分の学ぶカをつちかいましょう。

読みたい資料をカンタン検索

# 白夜と温泉の国へ

機械工学科教授　木村 茂雄

図１　日本からアイスランド、レイキャビクまでの経路

Led Zeppelin の名曲「移民の歌」に歌われる白夜と温泉の国、アイスランドを訪問しました。本学が参加した欧州の共同研究の会議が開催され、研究の成果を報告することが目的です。アイスランドへはヘルシンキ、オスロ経由となりました（図 1）。図に見られるように日本と比べると随分と北にありますから、とても寒いと思われるでしょうが、メキシコ湾流のおかげで真冬でも最低平均気温は摂氏−2 度程度とのこと。東京とさほど変わりありません。アイスランドといっても年がら年中氷ばかりではないのです。

いくつかアイスランドでの面白い経験を紹介しましょう。図 2 はバスの車窓からの風景です。火山国のアイスランドは、国全体が溶岩に覆われています。図中の湯気は「ブルーラグーン」からのものです。アイスランドは電力の 80%を水力に、残りを地熱に頼っていて、この地熱発電の余熱を使った世界最大の露天温泉施設をこのように呼んでいます。火山の国ですから、水道水も温泉の臭いを発します。温泉になれていない多くの同僚は「臭い。おかしいぞ」と盛んに文句を言っていました。

図２　アイスランドの大地（湯気は温泉から）

今回の会議のホストは電力会社で、建屋の脇には何台かの調査用の車がありました（図 3）。冬に山岳地帯を走る時には、滑らないようにするためタイヤの空気を抜くそうです。そのためとても厚いタイヤを装着しています。説明を聞くまでは「違法改造車ばかりだな」といぶかっておりました。

アイスランドは日本と同じ捕鯨国です。郷土料理を試した友人は、「クジラとイルカだった。ウェー」と顔をしかめて感想を述べていました。残念ながら僕はこれに参加しなかったので味の評価はできません。

溶岩大地のアイスランドには資源となるような森林はありません。ところが、ホテルといい、会議の会場といい、まるで北欧の内装です（図 4）。ふんだんに木材が使われ、とても暖かな印象を受けました。居心地のよい滞在であったことは言うまでもありません。

本稿は図書館 Café のためですから、最後に一言を添えましょう。アイスランドでは冬に薄暗い昼を過ごさねばなりません。外出を楽しむ環境ではないのです。そのためか自宅で読書をすることが多く、一人当たりの書籍発行部数は世界的にも高いと聞きました。さてさて日本はどうなのでしょうか？

図３　氷河登攀用の車

図４　会議場の全景

## 先生おすすめの１冊

# 武田邦彦『リサイクル幻想』

応用化学科准教授　本田 数博

**武田邦彦『リサイクル幻想』**
**図書館２階書架に所蔵**
**（請求記号　518.52||T）**

本書は、リサイクル活動の無理・矛盾を工学の立場から丁寧に説明し、あるべきリサイクル活動（社会）を提言します。

「混ざったものから欲しい成分を分離するのは大変」など熱力学を基礎とする物質科学の考え方を用いて、リサイクル活動の問題点にズバリと切り込み、その問題点に迫ります。

例えば、ペットボトルのリサイクルについて、石油から直接ペットボトルを作ると１本あたり 40 グラムの石油が必要であるのに対して、使用済みペットボトルだと 150 グラムの石油を消費してしまい、環境に優しくない実態を明らかにします。

「何が何でもリサイクル」「リサイクルさえできれば環境問題は解決」など感情的な「リサイクル原理主義」を否定して、科学的根拠のある『来るべき循環型社会とは何なのか』を示唆します。

自然科学の知識・考え方が環境問題の本質を見抜く力となることを改めて認識させてくれる共感の一冊です。

リサイクルが本当に環境に優しい活動なのか疑問に感じる学生諸君にお勧めの一冊です。

# 赤瀬川原平『新解さんの謎』

情報工学科助教　鈴木 孝幸

**赤瀬川原平『新解さんの謎』**
**図書館１階回転書架に所蔵**
**（請求記号　B914||A）**

ここで言う「新解さん」とは、三省堂が刊行する『新明解国語辞典』の愛称のことです。特定の個人のことではありません。国語辞書といえば、通常は「辞書を引く」ものですが、この本では「辞書を読む」ことの愉（たの）しみが味わえます。著者の赤瀬川さん（『老人力』の著者でもあります）の語り口も“はまる”と面白いです。

辞書といえば、言葉の意味を説明して、用例をあげているものですが、「新解さん」は独特です。世にあまたある「用例」の中から、辞書に採録された「用例」がどうして選ばれたのかをある種「判じ物」のように考えると、「新解さん」のキャラクターが立ち上がってきます。また、辞書の場合、第〇版として時代に合わせて改定されていきますが、その変遷からも、「新解さん」が見えてきます。辞書なんてどれでも同じだと思っている方にこそ、読んで欲しいと思います。

今や、紙の辞書を使う人は少数派なのかもしれませんが、電子的に「検索する」という行為からは、この愉しみは出てこないかもしれません。是非とも「紙」の辞書を手にとって「読んで」みてください。

注意して欲しいのは、幽霊の見える人と見えない人がいるように、「新解さん」の見える人と見えない人がいるそうです。見える人には、楽しい活字の世界が待っています。

## 図書館の本で旅にでよう！

図書館１階の『地球の歩き方』シリーズでプランニング。旅先の気になるキーワードで蔵書も検索。
図書館で、より詳しい情報を手に入れてください。

**『地球の歩き方』は、図書館１階の軽図書コーナーにあります。**